

---

# 魔法少女リリカルなのは ～平穩のため守り戦う少年～

RAINN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～平穏のため守り戦う少年～

### 【Nコード】

N1047X

### 【作者名】

RAINN

### 【あらすじ】

青年は少年の頃家族を失った。心を開いた孤児院にて火災に合い全てを失った。そんな少年は青年になり新しい家族と新たな決意を手に入れた。不幸な子供を救うために……。そんな将来の自分の姿を夢見ながら久しぶりに実家に帰るために電車に乗った。しかしそこに人生を大きく狂わす事態に……。なんだかんだで全てを救いたがために魔導の『力』を手に入れるという物語です。

\*最初の方は暗いですが徐々に普通、またはほのぼのに持っていく  
たいと思います。あと始めての投稿になるのでお手柔らかにお願い  
します。\*

## プロローグ？（前書き）

初めての投稿になるのでよろしく願いします

誤字などもたくさんあると思いますのでそれは教えてくださると嬉しいです。

他にも意見、感想などもしてくださいるともっと嬉しいです

それでは初めての作品ですがどうぞ！

## ブローグ？

「ブローグは…どっだ？」

ただ俺はそんなことしか言えない。  
それもそのはずなんだよ。

高校最後の夏休み、その休みを使って自分を育ててくれた義理の母親に

会いに電車に乗っていたところ、トンネルに差し掛かった瞬間に急に

揺れたかと思いきやその後の記憶が無いのである。

ついでに育ての親というのは、今の俺の親は本当の親では無いのだ。

俺が本当の親を失ったのは世間的に言う『幼少期』のときである。

両親が亡くなってしまった理由は簡単なものだった。

ただのドSな強盗がやって来た、ただそれだけが原因である。

急にやって来た強盗は何を思ったか俺の目の前で両親、

母親は惨殺で父親は近くにあった椅子などによって

撲殺されたのだ。だがそんなことをしている暇など本

当は無く、両親の叫び声を聞いた近所の人が警察に連絡  
していたのである。

警察が来たのはちょうど父親を撲殺し終えたところだった  
ため、俺は外見は無傷ですんだ…。

しかし内面（心）はとんでもなくダメージを受けていた。

幼少期という幼いときにいつも優しくしてくれ

ていた両親があまりにも酷い殺され方を目の前で行われ

たのだ。そのせいか2人の返り血を直に浴びていたのだ。

俺はその後は孤児院に預けられることになっていた。

でも俺は両親が殺されたトラウマのせいでまったく心を開

かなくなっていた。だがね、あの孤児院に行けたからこ

そ俺は救われたのかなあ、と思うんだ。

あそこの管理人のお婆ちゃんはいつも俺に優しくし続け

てくれた。どれだけ言葉で貶そうと、どれだけ遠ざけようとしても  
だ。

それであるとき聞いたんだ。

「どうしてこんなに酷いことしているのに、どうして僕に構うの…?」

そうしたらなんて言ったと思う?

「泣いている子供を見捨てるようなこと、私には絶対にできません。それに諦める位なら最初からこの施設で預かる気すらしませんでしたから。」

そのときに自分の目を擦っても全然濡れていませんでした。

だから涙なんて流してない、泣いてなんかいないって答えてやったんですよ。

そしたら

「あなたが泣いているのは心なんですよ…。おいで…。お婆ちゃんがちゃんとみてあげるから。」

って、こんなことを優しく微笑みながら、それに言葉に詰まるなどもなく言われたんだよ。もうそのときはお婆ちゃんに抱かれて大泣きしたよ。あの迷いの無い言葉と

暖かさがあつたからこそ元の自分を取り戻せたんだと思う。

それからしばらく経った……

今度はしっかり覚えている。あの時は確か『13歳』のときの事件だった。

今度は火災、いや…放火だった。

自分はまだ中に残っていたし、誰一人として外にはいなかった。

全員が気づいたのは子供の叫び声が聞こえた後だった。

もうそのときには軽く手遅れだった。崩れてき

たものに下敷きのされている子供を救うためにお婆ちゃん

んが、そんなことをしているうちにお婆ちゃんまでもが

下敷きになった。それを助けようと複数の子供たちが助

けようとなりました。

えっ、俺は何をしていたかだった？

あのときの事を鮮明に、その場にいるかのように思ってしまうほど鮮明に思い出していた。

あのときに聞いた両親の叫び声、あのときの血の臭い、

あのときの父親と母親の成れの果て…肉塊を。

正直吐き気がしたあのときと同じようなことが起きている。俺は立ち尽くすことしか出来ない無力な人間なんだと…。

そんなことを考えているうちに次は助けようとしていた

子供たちが炎によって焼かれていった。俺はどうしたら

いいかまったく判断が付かなくなっていた。いつも一緒

にいた子供たちが燃えている。あのとき助けてくれたお

婆ちゃんが死に掛けている…。そう悟ったときには助けに行こうと  
していた。

しかし…

「逃げなさいっ！！！」

そんなお婆ちゃん悲痛な叫び声を聞いて自分が行動したのは……

己を護ることだった

ただただ出口に向かって走り出した。

お婆ちゃんの姿、いつも一緒に遊んでいた子供たちの姿  
を目に焼き付けながら…。

こんなことは二度と起こさせないために、かつての友達  
の変わり果てた姿を、鼻に衝くような体が焼け焦げた臭  
いを、赤い血の池を、それよりも紅い紅蓮の炎を……  
そして何よりも

『己の無力さを』

そして俺は、俺だけは生き残った。

外に逃げてどんどん燃えていつている孤児院を唯呆然と  
見ていたときにやっと消防車が救急車がやって来たのである。

当然のごとく俺はすぐにでも保護されるはずだが

なにをされても炎が消えるまで動こうとしなかった…

結果は最悪だった。

生存者はたった1名、他は全員が…死亡

そのときに俺は誓った。

こんな風に子供たちが傷つかないように何があっても助

けられるようになる、と。

自らの両親に、友達になってくれた孤児院の子供たちに

、そしてなによりも自分を救ってくれたお婆ちゃんに。

それから数年の時があった。

また違う孤児院に預けられ、そこで今の両親に出会った

。そして引き取られた。

なぜ俺を引き取ったのか、と聞いてみた。

何でも「お前の瞳がとても辛そうに見えたから、救ってやりたいと心の奥底から思ったから」らしい。

なんとも的を射たような答えであった。正直苦笑いしか出来ていなかったと思う。

そして両親は俺を闇の底から救い出してくれた。

それでもやはり思うところがあるのかニュースなどで犯

罪者を見るとなんとも言えない嫌悪感に襲われた。

それでも普段は普通、いや、友達との縁を大事にしよう  
とたくさん友達もつくった。

『誰にでも優しい』

これが友達からの一番最初に聞くことが出来る第一人称であった。  
楽しい生活を送っていた。

そんな少年は青年になり大きな選択ミスをした。

唯一つ。

そう。

あの電車に乗ることが……

『彼の運命を大きく変えさせることになるとは』

そして冒頭へと戻る……。。

## プロローグ？（後書き）

自分では暗い話はこのレベルでしか書けませんでした……。

まあどんどん普通に持って行けるようにがんばります！

## プロローグ？（前書き）

二回目の投稿になりますRAINNです。

駄文で、更新も遅いでしょうがしばらくは失踪

しないと思うのでよろしくお願いします

PS：誰か小説の分け方で 章っていう仕方わかるかたいますか？  
知っているならメールで教えていただけると嬉しいですよ。

## プロローグ？

side？

俺の目の前には不思議な光景が映っていた。

そこは真っ白な世界。

どこまでも続くような真っ白な世界。

そしてなぜかまるで私が女神です、というような格好に金髪に少しウェーブのかかった長い髪の美女がいた。

ついでに何故か涙を流しながら何か決心したかのように頷きながら涙を拭いていた。

「え〜と…すいませ〜ん」

「あつ、はい！どうしました？」

「ここはどこでしょうか？」

「ここは生と死の狭間、または根源などと呼ばれている場所でしょうかね」

「根元ツ！てかなぜ根元」

いや、この言葉には流石に驚いたよ。

さすがにあんな生活ずつとしていたらそれこそ体を壊すので、たまに娯楽として

マンガやアニメなども見ていたりするのだよ。

その中にFate/stay nightというものがあつたのを覚えていたからだ凄く驚いたよ…。

「根源に驚く前に生と死の狭間について突っ込まないんですか？」

「え？」

「なんでそこで疑問なんですか!？」

「いやだって、アレは流石に死んだでしょう。むしろ痛みさえ無かったですし…」

「まあ、そのとうりなんですけど…」

うん。アレは死んだって確信できる感じだったもん。

でもなんでそんな死んだ俺がこの人とあっているんだ？

てか、誰？

「誰かと思われても自分は女神だー、としか返せないんですが…」

「やっぱりなんだ…。まあそれよりもなんでこんなところの俺はいるんですか？」

「私があなたに転生して貰いたいがために呼んじやいました」

「いやいや、そんな軽いノリで言われても。ねえ？」

そんな言葉を返すと女神は急に泣き出しながら

「グスツ、だつて、だつてあんな、あんな辛い人生だつたんだから  
少くらしい幸せなことがあつてもいいじゃないの？ 幸せじゃなかった  
としてもあなたが決めた『子供たちを救う』つて言うのくらいは叶  
えて

あげたくなつちゃうじゃないのっ！」

「はあ…？」

神が人間に同情していいのか……？

「だからね、貴方には転生してもらいたいの。特典なんか色々叶  
えてあげるし…」

「貰えるんなら有り難く頂きますけどどこの世界ですか？」

「なんと！『リリカルなのは』の世界です」

「まさかあの？」

「そのまさかなんですっ！」

（なんていうか驚きまくつてばかりだな。あんまり詳しいことは  
覚えてないけど全シリーズとも少しは覚えているんだけどな…。  
たしか3年生の子が魔法に巻き込まれたり、その敵役の子が母親の  
虐待

を受けているだとか、最終的には仲良くなったりする話だったよな。

）  
そんな感じで物語のあらすじを思い出していると、

（あれ？たしかこれって悲しい別れが2期ともなかったけど？  
たしかプレシアとラインとか言うのが・・・）

（やっぱり出来るならたくさんの人を救いたいな・・・）

内心で決心していると

「そろそろ帰ってきてくださーい」

「あ、はいはい。で、どこまで話してたっけ？」

「転生先が『リリカルなのは』でいいですかって聞いた所です」

「OKですよ」

「じゃあ次は特典のほうですね。今回は私の独断ってところもあるのでいくつでもいいですよ」

「その前に一つ質問いいですか？」

「？いいですよ」

「死者転「それは駄目よ」「…なぜ？」」

「死者転生は完全なる禁忌の領域なのよ。だからそんなことしようなら他の神から『バンッ』ってされるわよ」

そういいながら手で銃を真似てこちらを撃ってきた。

「じゃあ死者じゃなければどんな重傷者でもOKってことですよね？」

「ええ、いけるわよ」

「じゃあ1つ目は魔力、筋力、脚力など全ての強化。

2つ目は転生前の記憶と知識の保有。

3つ目はオリジナル魔法の作成。

4つ目は自らリミッターでの封印・解除が瞬時に行えること。

5つ目は魔力変換資質で『炎熱』『電気』『氷結』の追加。

6つ目はアリシアを死んだのではなく限りなく死に近い状態、死んでいると誤認されていることにして」

「へへ、考えるわね貴方。たしかにこれならいけるわよ。他は？」

「7つ目は1度の使用しか出来ないけれど周りの人たちの完全回復+プレシアさんにだけアリシアとの別かれた年齢まで戻してあげて。」

「プレシアも救うつもりなのね…まあいいわ。他は？」

「8つ目は闇の書を夜天の書に戻すせる力を」

「それも大丈夫よ。その代わりに一回防衛プログラムを消してからだからね。」

「わかったよ。」

「9つ目はデバイスなんだけど…」

「どうしたの？」

「こんなのでいいけるかな？」

そう言いながらなんとなく女神の耳元で喋っていく。

〜密談中〜

「OKよ。そのくらい全然いけるわよ！折角なんだしぴつたり10個にしといたら？」

「折角と言われてもねえ…」

「よし！なら向こうに行つてから自由に決めて頂戴！ただし1個だけだから考えて使うようにね。わかった？」

「はいっ！」「(ニ)」

「！！！！(急な笑顔は反則よ…)(ゴホンッ、じゃあ次は容姿のほうだけど…」

「女神様のほうで勝手に考えて貰っていいですか？」

「私が考えちゃっていいのね？(どんなのにしようかしら？なんな





『やってくるは…!?!』 (前書き)

うん…

前書きって主人公たちを使って書いたほうがいいのかな？

そのほうがいいって人がいたら言ってください。

次回からはそうするので…

では、本編をどうぞ！

『やってくるは…!?!』

『やってくるは…!?!』

side 優真

いきなりですがもう僕も三歳の誕生日になっちゃいました。  
はあ？ 早すぎる？ それになぜ僕？

いやだって赤ちゃんの頃のことを報告しても何にもならんでしょ  
うが。

ろくに動けないし喋れないし……。  
んな感じで今回の大イベント？まで飛ばしちゃった訳です。

はい、すみません。

なぜ僕かと言うと、三歳児が俺なんて言うすとんごい違和感がある  
し、親の影響

ですね……。一度でも使うと絶対に反抗期だのなんだのと騒がれる  
よ、アレは……。

重度の親馬鹿です。

でも親としては普通にいい人たちですよ。まあそれに便乗して僕も  
甘え

さして貰っているんだけどね。

僕の容姿は瞳の色と髪以外は普通だよ。瞳の色は母さん譲りの金色  
の瞳です。

だって金色の瞳は母さん以外今のところ見たことがないからね。でも鮮やかな金色でもとても綺麗だと思うから良いんだよ。で、髪の色っていうのは茶色に少し黒が混ざった茶髪です。

え、普通じゃないかって？

いや色じゃなくて長さだよ。前に髪を切りたいと母さんに言ったら

「そんな綺麗な髪切っちゃ駄目！指触りもいいのに勿体ないわよ！！！」

なんて言われたよ。確かに触り心地も自分で触っても良いのは分かるし、

色も黒と茶色の混ざり具合がちょうど良いから色だって普通に良いんだけど……。

次に父さんに講義をしに行ったら同じようなことを言われたよ。

だから今現在は腰のあたりまでのストレートです。

こんな髪型に何故か知らないけど見事なまでもの中性的な顔立ちのせいで、初見の

人からは絶対に女の子と勘違いされています。

あ、それと報告し忘れそうになっていましたが、なんと僕にも妹がいました。 (ドンドンパフパフ)

と言っても血の繋がってないんですけどもね。歳は僕と同じで名前が『松原 真奈』です。

黒髪のセミロングに茶色の瞳の可愛い妹なんですよ。どういう経緯だったかと言うと

僕が生まれる

一人じゃ寂しいんじゃないか？

なら子供を引き取っちゃおう

孤児院より同じ年齢の真奈を発見

確保〜!!!

こんな感じです。嘘偽りは一切ございませんよ。

なんで僕がこんなことを知っているかって？

そりゃ、最初から自我があったから覚えていたんだよ。

血が繋がっていなくて別に何の関係も無いんだけどね。

で、今日がなんのイベントなのかと言うと今朝女神から

〜回想中〜

(今日は誕生日祝いでことごとくユニゾンデバイスと普通のデバイスを送っちゃったからね)

などと言われましたよ

(いや!どつやっただよ!)

(いやだってね、ユニゾンデバイスって人型よね。だったらってことでそちらの家族扱ってことであつてどうかなってことであつてね。)

(いやいや、だからどうするんだって?)

(とりあえず今日のお楽しみってことであつてね?あと普通のデバイスはその子に持たしているからね。普通に自分がユニゾンデバイスだつてことも貴方のこともある程度までは理解してるから大丈夫よ)

(だからそういつ問だ(じゃあまたね)(…いじゃないのに…))

～回想終了～

てなことがあつたんですよ。

いまいち訳が分からん……。誰か説明をプリーズ!

そういえばもう一つ報告したいことがあるんですよ。今僕たちが住んでいる家が

どっかで見覚えがあるんですよ。広い武家屋敷に広い庭、その庭を眺められる縁側、あと道場に土蔵。

うん。Fate/stay nightの衛宮さん家ですね。わかります。

瓜二つなんですよ。微妙に違う場所はあるけど、ふつうに住み心地はいいからいいけどね。

「「ただいま」」

「おかえり」

ちょうどいいタイミングで帰ってきたな、おい。

結局ついさっきの話は分からずじまいか……。まあいいや。

とりあえず始めてのデバイスだし楽しみにしてればいいことか……。それと現在真奈はお昼寝中ですので。

「優ちゃん、ちょっと来て」

「はいはい、今行くよ」

何かあるのか？ いやいや母さんが誕生日プレゼントでデバイスなんてないよな……。

いや、あの人ならありえそうだから困るな……。とりあえず逝ってみれば分かるか。

何？ 字が違つ？ そんなことは気にするな。唯の僕の勘だから……

そんなことを考えながら玄関に向かって早歩きで向かっていった。

え〜と……………

「……どこから攫って来たの？」

「いや！？攫って来てないからね！！」

「じゃあどこから拉致ってきたの？」

「なんでそういう結果になるの！？」

「じゃあどこから誘か「だから違っつて！！」……そうなの？」

そう僕が聞いたのは Fate / stay night のイリヤ似どころかイリヤ本人みたいなの  
僕と同じ位の歳の子が僕の前にいるので聞いてみた。

「うん。そうだよ」

つてここ本当にリリカルの世界なのか？  
なんかどっかで聖杯とかありそうな気がしてきたよ……。ついでにも  
う少しからかってみることに。

「うわっ！もうしっかり催眠をしてあるよ！」

「…もういいよ。犯罪者でいいですよ…」

あ！ヤバイぞこれは…。そしてなぜ急に犯罪者になったの！？  
父さんの瞳のハイライトが消えたや…。

「そうだよな、俺なんて唯の犯罪者だもんな……。どうせ俺なんて…」



「いや、これくらい普通だと思っただけよ」

「えーと…」

「ああ、ごめんね。この子は優真っていうの。私たちの子供よ」

「はじめまして優真。私の名前はイリヤよ。」

「あ、はじめましてイリヤ…ちゃん？。僕は優真って…さっき聞いたか。」

「普通にイリヤでいいわよ」

うわ、本当にイリヤだったよ。普通に可愛いから良いけどもさ。口  
リコンじゃないからね！  
決してロリコンじゃないからね！！

そんなこんなでイリヤが家族になりました

『やってくるは…!?!』 (後書き)

誰かの意見が欲しいです。

しゅ……。

『手に取る**は**武器、手にするのは**守る力**』(前書き)

とくに書くこともないので

どーぞー！ー！ー！

『手に取るは武器、手にするのは守る力』

side 優真

イリヤがやってきた日。  
なんとか父さんも復活して父さんと母さんが最初にしたのは、家族  
全員の自己紹介だった。

寝ていた真奈もちょうど起きてきたのでタイミング的にはちょうど  
良く居間に集まり  
自己紹介したあとはイリヤをイリヤ専用の部屋に案内した。

そんなことをしているうちにはもう夜になっていた。  
その後は食事を僕も手伝いながら母さんと二人でつくったりした。  
今回が初めてではなく前から  
何回も手伝っているのもう手馴れたものだ。

なんでも母さんいわく、  
「優ちゃんは筋がいいわね。教えればどんどん覚えて美味しくなっ  
ていくし。」

といつことらしい。  
僕自身も料理は楽しいから良いんだけどもね。

でも僕の誕生日に家にやって来たイリヤ……なにかがあるような気

がするけどほつといても平気かな？

そんなことがありつつも就寝するために自分の部屋にて布団を出しています。ついでに家は基本敷布団です。

〈布団準備中〉

「よし！ちゃんと綺麗に準備できたよ、うんうん。じゃあ寝ようか」「優真、ちよつといい？」「な……ってイリヤ？

「入ってきていいよイリヤ。」

別に断る理由もないのでとりあえず招き入れることに。

「どうしたのイリヤ？」

まずは目的を聞いとかないと……

「優真にコレを渡してほしいって言われてたのを思い出したから渡しに来たの。」

と言いながらこちらに差し出してきたのは、鎖状のチェーンのアミレットネックレスで

銀色の宝石がついている指輪と、同じようにされている青色の宝石がついている指輪が別々に二つ。

もう一つはまただがペンダントで菱形の黒い宝石がついてあるもの

が一つある。

「これは？」

「優真のデバイスだよ」

「えっ！」

なんでイリヤがデバイスのことなんて知ってるんだ？それにやっばり……。

「もしかしてイリヤってユニゾンデバイスなの？」

神様が送ってきた？のなら……

「そうだよ（ニコッ）」

なんでそんな笑顔で言うのかな／＼／

「私を創った人があなたに会いに行つてついでに一緒に住んできなさいっ、て言つてたの」

「創った人って？」

「カレン・ウォーカーって名前の金髪の女性だよ」

誰だ…それ…うん？…金髪？…カレン？…

「ごめんちょっと待ってね」

「?いいよ」

とりあえず了承も貰えたし…

【え〜と繋がりましたか?】

【繋がってるわよ〜】

【カレン・ウォーカーさん?】

【ええ。カレンという名前の神様よ〜】

(……やっぱりか)

今の念話にてカレンさん?の苗字が分かってしまったよ。なんとなく偽名な気もするけど…。

【デバイスのことはありがとうございます。】

【いえいえ、気になさらず〜】

【それと一つ聞いていいですか?】

【いいわよ】

【僕が頼んだのってインテリジェントデバイスが二つとユニゾンデバイスが一つって頼んだよね?】

【そうね。そのとおりよ】

【じゃあなんでデバイスが三つもあるの？】

【本当は四つなんだけど、しいていうならばサービスよ】

【サービス？それに四つ？】

イリヤが差し出して来たのは確かに三つだったはずなんだけども……

【イリヤ本人にも一つとあなたの妹さんのぶんで四つよ】

【イリヤのは納得できるけどなんで真奈にまでですか？】

【どうしても魔法のことを話さないといけなくなったとき、巻き込まれたりしないようにさせるために魔法を覚えさして置くのはいいと思うんだけど】

【そういうことですか……】

たしかに神様の言うように魔法のことが知られたときにはあったほうが良いだろう。でも今は……

【今すぐは渡さなくてもいいんですよね？】

【むしろずっと渡さなくても、明日渡そうともあなたの自由よ】

【そうですね。ありがとうございます。】

【はいはい。じゃあね〜】

ここで神様との念話が終わる

「ねえ、イリヤ？」

「うん？どうしたの？」

「これはどれが僕のデバイスなの？」

「！優真はやっぱりカレンと知り合いなのね。それと優真のはこれとこれだよ」

そついい手渡してくれるのは銀色の宝石がついた指輪のアミュレットネックレスと、菱形の黒い宝石がついたペンダントだった。

「ありがとう、イリヤ」(ニコ)

「ノノノい、いえ、どういたしまして(そんな可愛い顔での笑顔は駄目だよ…)」

そんなイリヤが考えていることについて分かるわけもなく、なぜイリヤが顔を少し赤くしているかは分からずに質問を続ける。

「で、この青いのが真奈のでイリヤのは？」

「これよ」

見せてくれたのは僕のや真奈と同じ指輪のアミュレットネックレスで赤色の宝石がついていた。

「ありがとう。もういいよ」

「本当に知り合いなんだ……。まだ言っていない私のデバイスのことも知っているんだし」

「さっき念話で少しね」

「まあいいわ。とりあえず用件は済んだところで私は戻らさせてもらおう」

「わかったよ。おやすみイリヤ」

「おやすみなさい優真」

こうしてイリヤは自分の部屋に戻っていった

『手に取るは武器、手にするのは守る力』(後書き)

次回からは結構自分の中では暗いと思っている話に入ります。

なので苦手な人は注意してください、以上！

『呪われた血 ？』(前書き)

今回はとても短いけど次回への前置きといつことだ……

では、ごーぞー！

『呪われた血？』

side 第三者

その少年はこの世界の人間ではなかった。元は青年。しかしその青年は呪われていた。

実際に呪われていると言うわけでは全くもってない。

なのに青年は正体不明の呪いのようなものに生まれた頃から罹っていた。

そう。

『死』という名の呪いに……………。

それは“青年”が“少年”に生まれ替わろうとも関係など無かった。

その血は効力をほぼ全て失いながらも最後の最後でまたも『家族の死』を“少年”に届ける。

それを最後に呪い自身の効果が無くなろうとも……………

少年に最後の『絶望』と、それにより覚醒する『力』を与えるために……

まだ花開かならうがその楔を打ち込むために……

『呪われた血？』

side 第三者

夕方、テレビを付けニュースを見る。  
そうすると

《今日5月7日昼ごろ、海鳴市の にある銀行にて銀行強盗がありました。》

銀行には犯人が三人で襲い現金5000万円を要求。》

《その時銀行内には行員23名、来客11名が銀行内にいた模様。犯人三人は猟銃をそれぞれが持つており、中に進入したあとに天井に発砲。》

《その後、銀行内にいた行員、来客の全員を拘束。そのさい警察へ

と通報しようとした  
行員の男性が猟銃で発砲され顔や首など10箇所近くが命中し、死  
亡。》

《そのあとに、来客に抵抗され手当たりしだいに周囲に発砲。全て  
が撃たれた後に警察が突入。》

《警察は突入したときには犯人のうち二人は気絶、もう一人は錯乱  
はしていたものの全て撃ちきって  
いたため容易に逮捕。》

《犯人を逮捕したあとの警察官に話しを聞いてみると、「銀行内は  
悲惨なことになっていた。」と  
少し青い顔をしながら説明をしてくれた。》

《銀行内は紅く染まっっていて、至る所が人の血で染まっっていて、行  
員や来客たちの無惨な  
ままでの姿がそこらかしこに転がっていました。》

《軽傷者は2名、重傷者は0名、死亡者が32名という悲惨な結果  
になってしまいました……》

《生き残ったのは二人とも4歳の松原優真君と松原真奈ちゃんの兄  
弟です》

《発見されたときには二人とも血まみれではありましたが傷自体はほとんどありませんでした。真奈ちゃんは気絶しており、優真君は膝立ちの状態で一緒に来ていた両親のもとでずっと何かを呟いていたとのことです》

《現在は二人とも話しが聞ける精神状態ではないということで、話しが聞け次第事件の詳細と犯人たちの罪状を詳しく報告したいと思います》

そこまででテレビは“金髪の女性”によって電源を消されてしまう

『呪われた血 ？』 (後書き)

普通はこんなに詳しくニュースではしないんですけどもね。

そこはこのさいスルーで行こうと書いてて思いました

ではまた次回に・・・

『呪われた血 ？』 (前書き)

今テキストのほうにいくつか書き溜めをしているのですが

本編までなかなか入らないよ………

それにオリキャラを何人か入れるから転生者が厳しい……

もういいかな？一人くらいでいいかな？ついでにゴールしても (ry

今回は残酷な部類？に入るので苦手な人は読まないほうが良いですよ

では、どーぞ！

『呪われた血？』

side 優真

僕は今両親と真奈ともに買い物途中にて銀行にいます。イリヤは現在お留守番中です。

デバイスたちも現在自宅に置いてあります。それどころかまだ起動すらしていないだけだね。

まだ必要ないし、普段から持ち歩くにしても絶対に母さんたちにいろいろ疑われるし……。

でも名前はもう考えているよ。黒い菱形の宝石がついているペンダントが『ハーデイス』で

男性型のAI。銀色の宝石がついた指輪のアミュレットは『ソリツディネ』っていう名前にして

女性型のAIにしました。

イリヤのデバイスの名前は『マニアコ』で男性型のAIだったよ。

普段あまり喋らない上に、喋った

ときの声がバーサーカー（紳士モード）と一緒にいたのには驚いたけど……。それにイリヤが僕のことを“お兄ちゃん”って呼ぶようになった。なぜ？

真奈のデバイスは本人が決めたら良いだろうし、まだ起動すらしてないからね……。

そんなわけで現在は海鳴にある銀行に来ていたのですが……

side 優真

「動くなーッ！！！」

そう言いながら覆面の男たち三人のうちの一人が猟銃を天井に向かって撃った。

すさまじい轟音が響きわたり、銃弾はコンクリートの天井を少し抉っていた。

銀行内にいる人々は悲鳴をあげたりなど色々な反応をしめしていた。

しかしその中でも一人場違いな子供が一人ここにいた。当然のごとくそれは優真である。

両親に真奈といっしょに抱かれながらも横目で犯人たちを“観察”していた。

(これくらいの奴等なら問題ないかな……)

“観察”の結果このような答えに行き着いた。なぜならば神様との出会いのときに、肉体の強化を頼んでいたからだ。しかしそれは犯人たちが一人での場合だ。それなのに三人同時となると流石に成功する確率が減ってしまう。いくら神様に頼んだからとはいえ、まだ四歳児であることには変わらないのだ。

(これは少し待たないといけないかな?)

そのあと犯人たちは現金を要求、その後にも誰かが隠れていないか、などを確認するために一人を残し他の二人は別々の場所へと向かっていく。

(よし！これなら…)

そう思っていた時だった。

「何をしていやがる！！！」

そこには30歳後半あたりの男性が電話を掛けていたのだ。

犯人はその男目掛けて

引き金を引き

撃った。

猟銃でその男性を撃つたのだ。

猟銃は散弾であったため貫通こそしなかったが、数10個の弾が男性の顔を首を、他にもいろいろんな場所に当たり倒れてしまった。

正直言ったらかなりこれは見ていて気持ち悪くなるものだった。優真は『過去』に見慣れていたが

ために表情を少しだけ曇らせる程度で済んでいるのだ。

他の人たちは小さい悲鳴をあげたり、口に手を当てるもの、無理やり目線を逸らすものなどさまざまだ。

(なんで…なんでこんなやつらのせいで……普通の人たちが死なな

くちやいけないんだ)

昔に覚えていた感情を今思い出している。こんな奴等に対して覚える嫌悪感。それ以上に強い殺意……………。

そのようなことを思い出していると

「うっ、ひっぐ…うわああああああん!!!!」

ここでまさかの真奈が泣き出してしまったのだ

(な!マズイツ!)

しかし次に掛けられる言葉と行動で静かになる

「うるさいぞ!糞餓鬼ツ!!!!!」

「ヒツ!」

そう怒鳴りながら猟銃を真奈に向ける

(間に合えツ!!!!!)

その思いとともに一気に真奈のもとに走るが

バンツ!!!!

その銃身から散弾が放たれ……



「真奈ッ！父さん！！！」

急いで二人の下に歩み寄る。真奈のほうは大きな怪我は無く、シヨツクで気絶しているのだろう。

それも当然だ。自分の目の前で父親が撃たれて、その血が自分に掛かってしまったのだから。

— 先ずは安心して父さんのほうを見る。

今もまだで続ける血。その体でまだ妹を抱き続けている。

明らかに致死量近くはもう出血している。腹などは散弾に抉られている。

脈は……………

「父……………さん……………？ねえ……………父さんってばッ！！！」

脈はもう……………

「嘘……………嘘だよね……………？嘘って言うてよ！」

“無かった”

父さんが死んだ。

あまりにも自分が慎重に動き過ぎたせいで。

もう少し早く動いていなかったせいで。

本当はこんなことを考えている暇などなかったのだ。

なのに…なのに…ここでそれを考えてしまった……

「おい！どうした！！！！」

その声に反応し振り返る

「なッ！この糞餓鬼が————！！！！」

猟銃の銃口がこちらに向けられる。

(ああ、死んだかな……………)

時がゆっくり、ゆっくりと刻もうとする。いわゆる“走馬灯”だ。

何も無い状態、相手が唯の拳銃ならば簡単とは言わないが、それでも避けられる可能性は十分にあった。

しかし今足跡には父さんから流れ出た大量の血。それに死んだという精神的シヨック。

最後の最大の理由は散弾だということだ。

思い出すは前世の小さいころの自分。まだ家族がいた頃から殺されたとき。

少年は家族の温もりと、人の残酷さを味わう

次に思い出すは孤児院。最初の心を閉ざしていた頃の自分。そして助け出してくれたお婆ちゃん。次の瞬間には燃えていく孤児院。子供たち。そしてなによりもお婆ちゃんがどんどん燃えていく。

少年は他人のこと。救済。そして家族以外の掛け替えのないものを。その掛け替えのないものを失うことを。人の憎さを、罪を、大切さを。そして人の愚かさを

そして少年は生き抜き青年へと成長する。

最後には己が今まで生き抜いてきた代償かのように……

最後には己の命を刈り取っていく。

その過程に幾度も思い出す。

人が殺される姿を

人が潰れる姿を

人の焼ける姿を、臭いを

人の

死に逝く姿を

そして意識は元に戻される。

目の前には

母さんがいた

「あ…、あ、あああ、あああああああああッ！！！！！！」  
頭が覚醒していく。

自分を抱きかかえるかのような姿で背中を銃のある方向へ向けて動  
かなった。

ただ“一言”を耳元で囁き、もう動くことすら心臓の鼓動すらしな  
かった……………

『ごめんね…』

そのあとはもう意識はあるようでないよなものだったが覚えている。そして聞こえている。

誰か他の人質にされていた人がどうにかしてくれたのだ。視えてはいないからどうなったかわからない。

ただ“解った”のはそのあとに銃声は何発も、何発も、何発も撃たれる音だった。

気づいたときには周りの人たちは全員死んでいた。その体に幾つもの傷を残して。

僕は……母さんが護ってくれたのだ。たぶん真奈も大丈夫だろう。しかしそんなことを考えている余裕はまったくなかった。

ただただ後悔する。

もっと早くに動けばと。

デバイスを持ってくればと。

いままで起こったことを全て後悔する。

side 第三者

その時少年はずっと、ずっと……。

何度も、何度も……。

眩き続ける

「自分のせいだ……自分のせいだ……」  
と。

その意識を一時的に失うまで。

『呪われた血 ？』（後書き）

今回は普段よりも長い約3000字でした。

普段は約1500字くらいですので大体倍ですね^^；

次の話もとりあえずは完成しているので日にちが開こうとも

ちゃんと更新はしますので

『目覚めた場所』（前書き）

早く原作のほうにいきたいです・・・

でもまだまだ原作までは時間が掛かりそうなので厄介ですね

いったい魔法はどこにいったんだ・・・？

## 『目覚めた場所』

side 優真

さあ、どうしようか？もう気持ちの整理はとりあえずついでいるからな……。

当然両親が死んだことは今でも悲しい。それに居てくれるのなら絶対に居て欲しいと

断言ができる。

でも何度目かになったこともあつてか気持ちの整理だけはすぐできるよになつていた。

そのおかげか両親が自分を護って死んでも心が“壊れること”はないからな……。

それよりも心配なのは妹の真奈のほうである。

真奈は自分みたいな経験もしていないのに、目の前で父親が殺されたんだ。大丈夫かな？

などと考えつつも隣にあるベッドを見る。そこには今もまだ眠っている真奈の姿がそこにはあつた。

「まだ起きてないんだね……。良かったのやら悪いのやら……」

実際に起きて全ての事を思い出そうとすれば多分、真奈は何かトラウマのようなものを

背負ってしまいかねない。

今はそつとして置いてあげよう。

そのあとはまず自分の体の確認をする。

まずは手を握ったり、開いたりしてみる。異常なしか…。足も両方動くし、他の場所も以上はないみたいだね。

体の状態を確認したあと真奈を起こさないようにしながら病室から出ることに。

「まずは誰か病院の関係者をつと…あ、いた」

思ったよりもすぐに見つかった。向こうも既にこちらに気づいていたようで、こちらに歩いて向ってきて、僕と同じくらいに目線がなるようにしゃがみ込んで話しかけてくる。

「君は…松原優真君かな？」

優しそうな、それでいて何かを考えているかのような声でこちらに聞いてくる

「はい、そうです。それよりもなんで僕と真奈が病院に居るんですか？」

とりあえず現状確認のためにもちゃんと聞いて置かないと…

「君は心当たりとかはあるかな？」

……ああ、そういうことか。とりあえずは本人に聞いて、もしも精神的なショックでその時の

記憶を失っている場合のことも考えているのかな？うん…

「いえ、全く分からないんですが…」

とりあえずは自分がどんな設定にされるかちよつと知ってみたいという、ちよつとした悪戯心で聞いてみる

「そうなのか…」

一瞬同情するような目線をこちらに送ってきたあとにいろいろ話してくれた。

何でも車同士での衝突事故だったらしい。

ちよつと僕たちは後部座席に座っていたから助かったと。いくらなんでも無理があるような……。

相手は4歳児だからってこれはねえ？

相手の方に会いたいといったときは、少し驚いきと戸惑ったような顔をされ、この病院には

いないから今は会えないと言われた。

“今”っていつたいいつになったら出会えるんだろうか？

その答えのあとに病室に戻ろうとしたら急に呼び止められ、

「君は両親が死んでしまつてどうとも思わないの？」

たぶんそれはちよつとした興味本位で聴いたのだろう。

自分の両親が死んだというのに冷静なその少年に対して……でもそんな理由だつたら貴方は医者として良いのか？

「それは御法度つてやつなんじゃないですか。血の繋がった人を、

それも両親を

亡くした子供に聞くなんて。それともここで泣き喚いて慰めて貰えばいいんですか？

好奇心は猫をも殺しちゃいますよ?」

「いや…それは……」

普通は患者のメンタルケアも医者の仕事のうちの一つだろうに……。もしかしてまだ医者になってからそんなに経っていないのかな？

「僕だって当然悲しいんですよ。それを割り切って今ここでこうやった態度で

居られるんです。いくら泣こうとも、もう帰ってこない人は絶対に帰ってこないものなんですよ。」

そう言い残して足早にこの場から離れることにした。

『目覚めた場所』（後書き）

今回は前ほど長くないのですぐに読み終わりますね・・・

なかなかちゃんとした文章が書けないよ・・・

『失った欠片（ピース）』（前書き）

今回は約1000文字と短いですが

どーぞ！

『失った欠片（ピース）』

side 優真

病院の人との話しを終えた後、そのまま自分の居た病室へと戻った。  
そこには上半身を起こした状態でベッドにいる真奈の姿がそこにあつた。

「真奈？」

「お、兄ちゃん…？ここは…どこなの？」

「ここは病院だよ、真奈」

「何、で？」

「それは僕もいまいち分からなんだ…。もう少ししたら病院の先生が来るから、そのとき  
にいつしよに聞こう」

「うん…」

さてと…ナースコールでも押して呼ぶかな……。

（時間経過中）

やっと来たよ。

「君たちが今回の事故の……」

「すみません、先生。僕たちいまいち今回のことを覚えてないんですよ。」

「なので何が起こったか説明してもらえませんか？」

「そうなのか、わかった。でも辛い事を言うから少し覚悟しておいてね。」

「……はい。」

「分かりました」

それからついさっき廊下で聞いた話と同じ様なことを話された。

「お父さんと……お母さんが……死んだ……」

「……ああ」

医者が部屋から出ていく。

「大丈夫、真奈……」

「お兄…ちゃん…、お兄ちゃんツ！」

そう小さな声で、今にも泣きだしそうな声で僕の服を少し掴んでいく。

「大丈夫…、大丈夫だよ」

そういい、その小さな体を、今も小刻みに震えている体をゆっくりとこっちに抱き寄せる。

その頭も優しく撫でてあげる。

「うっ…うっ…うわーーーーーん！！」

僕の胸の中で泣き始める。そのまま撫で続けてあげる。これ以外僕には何もできない。何もできないんだ……。

「大丈夫？真奈？」

あれから5分ほど経ってから落ち着き始めたみたいだ。

「うん……………」

「ごめんね、ごめんね真奈……。お兄ちゃんなのに何もできなくて…」

「ううん……。お兄ちゃんが謝ることない、謝る事なんてないよ……。」

「ありがとう……ありがとう……グスッ……」

少くらい泣いてもいいよね……

side 真奈

お母さんとお父さんが死んでしまったと聞いたときは本当に何をどうすればいいのかが

分からなくなってしまうて、お兄ちゃんに抱きつきながら長い時間泣いてしまった……。

でもお兄ちゃんは平気なんだろうか……？

「大丈夫？真奈？」

「うん……………」

「ごめんね、ごめんね真奈……。お兄ちゃんなのに何もできなくて……」

なんでお兄ちゃんのせいみたいになっているの？そんなこと絶対にないよ……。

「うっん……。お兄ちゃんが謝ることない。謝る事なんてないよ……」

「ありがとう……ありがとう……グスッ……」

そういいながら私に抱きついてきて少しの間泣き出した。やっぱりお兄ちゃんも悲しかったんだね……。

そう思いながらお兄ちゃんの背中をさすってあげる事にした。

『出会い』（前書き）

特に書くこともないので

どーぞー！

『田舎』

side 優真

うづうづ……。やっぱりいなくなると悲しいんだね。結局泣いちゃうか……。アレでも妹の前だからって我慢してたのに、はぁ…………。

「どうしたのお兄ちゃん？」

「いや…なんでもないよ(ニッコ)」

「…本当に？」

「本当だよ」

「ふ〜ん…」

何故か勘がするどいね…………。

? コンコンッ?

ん? 誰か来た?

「どござ〜」

「お兄ちゃんッ！……！」

「うわッ！」

扉が開いたかと思ったらイリヤが僕に跳びついてきた。しかしベッドの上で膝立ちのような体勢でいたので支えられず、そのまま倒れてしまいベッドに押し倒され、馬乗りのような体勢になってしまう。

「イリヤッ！……！」

「大丈夫お兄ちゃん！？どこも怪我はない？」

「どこも怪我はないからまず「良かった〜……」……イリヤ？」

イリヤは安堵の声をだしながら、馬乗りの体勢のまま抱きついてくる。

「ノノノイリヤ……とりあえず退こうか？」

「仕方ないな〜……」

「なんでね……」

どこかの某武家屋敷の主のようなことを言ってしまう。

「なんでもかんでももないの！心配したんだから……」

「ごめんね……それにありがとう」

そう言いまだ抱きついたままのイリヤの頭を優しく撫でてあげる。

「／＼／＼／＼／＼ッ」

？一旦撫でるのを止めてイリヤに聞いてみる。そうするとなぜか「あっ」「っ」という声をあげてこちらを寂しそつに見てくる。

「どうやってここまで来れたの、イリヤ？」

「この人に送ってきて貰ったんだよ」【ちょっと話しをあわせて】  
「」

そついいイリヤが念話をしながら扉のほうを指さした

「ッ！この人？」【わかったよ】「」

そつして扉の方を見ると、そこにいたのは

「どうも、優真君」

「かみ・・・じゃなかった…。カレンさん？」

そこにいたのは何時ぞやあった神様のカレンさんがそこにいた。

「ええ、そのカレンさんですよ」【この子たちの前で神様は止めてね】「」

「人違いじゃなくて良かったですよ。でもどうしてここにいるんですか？」【わかりました。でも後からここに来た本当の理由を…】「」

「

マルチタスク

現在並列思考を使つての会話と念話で別々の話しをしている最中です。これがまた覚えるのに苦労しましたよ……………。

「あなたが事故に巻き込まれたつて聞いてね、イリヤちゃんも一緒に連れて来たのよ。(【ええ、わかってるわ。あと話しを合わせてね】)」

「それはすいません……………。でもどこで知つたんですか？(【それも承知の上ですよ。】)」

「普通にテレビのニュースを見ただけよ。(【これは本当よ。それよりもあなた記憶が…】)」

「そうだったんですか。(【いえ、あれは嘘ですよ。全部覚えています】)」

「ッ！(【なんであんな風に答えたのよ？】)」

(【普通に興味本意だったんですけど、医者言葉で少々むかついてしまって…。ばらす機会が無くなってしまって…】)

(【はあ…。少し呆れるわよ……………。でもそういうことは“全部”覚えてるって言うことよね？もしかして真奈ちゃんも？】)

(【いえ、僕は“全部”覚えていますが、真奈のほうは本当にあのときのことだけ忘れてるみたいなので……………】)

(【分かってるわよ。事故つてことどうせばいいのよね？】)

）【ありがとうございます。】

一通り念話が終わったところで真奈が

「ええっと…お兄ちゃん？この人って……」

そっぴいえば真奈は知らないのか……なら

「この人は母さんや父さんの友達のカレン・ウォーカーさんだよ。真奈はちょうど会ったことが無かったんだね」

「え？でもイリヤちゃんは…？」

「イリヤも前に一度だけ会ったことがあったんだよ」

「そうだったんだ…。初めまして、松原真奈っていいいます」

納得しちゃうんだね…。今ので……

「初めまして真奈ちゃん。顔を直接見たのは今回が初めてだね。私  
はカレン・ウォーカーっていうの。カレンって呼んでね」

「はい、わかりました。カレンさんっ！（ニコッ）」

「で、今回ここに来たこと理由を話してもいいかしら？」

「はい…。」

「最初に結論から言っちゃうけど…」

あなたたちは今知り合った程度の女性と孤児院

どっちに引き取られるのがいい？」

『選ぶ“未来”、そして一つになる意思』(前書き)

主人公の設定は原作が始まってから投稿したいと思っているんですが、

その原作に入るまでがとても長い・・・それに他の転生者の魔法が思いつかん・・・

もう別に安直な名前でもいいでしょうか？

とりあえず本編をどうぞ！

『選ぶ“未来”、そして一つになる意思』

side 優真

「最初に結論から言っちゃうけど…

あなたたちは今知り合った程度の女性と孤児院

どっちに引き取られるのがいい？」

へ…？今なんて言った…？

「実際そちらの家でいることはあまりできないから、いつしよにいる時間はあまりないけどね」

つまり

「あなたたちの保護者…家族にならないかってことよ」

なん…で…

「このままじゃあなたたちは絶対に孤児院行きになるでしょうね。」

そしたらあなたたちは多分いつしよにはいらなくなるでしょう。  
あなたたち三人を全員一度で引き取ってくれるような人だってあま  
りいない

と思うしね…。そうになったら本当に別々になるわよ。」

そんな……そんなこと……

「それが嫌なら形だけでも私に引き取られたっていうことにしたら  
いいわ。

そうすればきつと三人でいることは叶うわよ。お金のことだって心  
配しなくても

毎月多めに振り込んであげるし、保護者がいないといろいろと厄介  
なこともあるものね」

本…当…に…？

「その代わり最初に言ったようにほとんど家には居てあげられない  
から、家事や買い物は

自分たちでやって貰わないといけないことになるけども……。」

「それでもいいのなら私があなたたちの母親の代わりにくらいなっ  
てあげるしわよ。

どうするの？」

そんなの当然に……

「今すぐに決めるなんてこと言わないわよ。なんなら少し三人で相談してみればいいでしょうし。」

そういうことだから私は一旦席を外すわね。少ししたらまた戻ってくるから…。」

そのときにでも返事を返してくれたらいいわ。」

そう言い残して部屋から出て行く。

side 真奈

「最初に結論から言っちゃうけど…」

あなたたちは今知り合った程度の女性と孤児院

どっちに引き取られるのがいい？」

え？何で急にそんなこと…？

「実際そちらの家でいることはあまりできないから、いつしよにいる時間はあまりないけどね」

なのにごうして……？

「あなたたちの保護者・・・家族にならないかってことよ」

本当に…？

「このままじゃあなたたちは絶対に孤児院行きになるでしょうね。そしたらあなたたちは多分いっしょにはいられなくなるでしょう。あなたたち三人を全員一度で引き取ってくれるような人だってあまりいない

と思うしね…。そうなったら本当に別々になるわよ。」

い…や…。お兄ちゃんやイリヤちゃんと離れるなんてそんなこと絶対に嫌ッ！…！！

「それが嫌なら形だけでも私に引き取られたっていうことにしたらいいわ。

そうすればきつと三人でいることは叶うわよ。お金のことだって心配しなくても

毎月多めに振り込んであげるし、保護者がいないといろいろと厄介なこともあるものね」

いいの…？…？そんなにしてくれて？

「その代わり最初に言ったようにほとんど家には居てあげられない

から、家事や買い物は

自分たちでやって貰わないといけないことになるけども……。」

「それでもいいのなら私があなたたちの母親の代わりにくらいなつてあげるしわよ。

どうするの？」

家事なんて全然大丈夫だから……だから……

「今すぐに決めるなんてこと言わないわよ。なんなら少し三人で相談してみれば

いいでしょうし。

そういうことだから私は一旦席を外すわね。少ししたらまた戻ってくるから……。

そのときにでも返事を返してくれたらいいわ。」

そう言い残して部屋から出て行く。

sideイリヤ

「最初に結論から言っちゃうけど……

あなたたちは今知り合った程度の女性と孤児院

どっちに引き取られるのがいい？」

何でそんなにこの子たちに責めは……

「実際そちらの家でいることはあまりできないから、いつしょにいる時間はあまりないけどね」

それが分かっているのなら尚更なのに……

「あなたたちの保護者……家族にならないかってことよ」

でも……

「このままじゃあなたたちは絶対に孤児院行きになるでしょうね。そしたらあなたたちは多分いつしよにはいられなくなるでしょう。あなたたち三人を全員一度で引き取ってくれるような人だってあまりいない  
と思うしね……。そうなったら本当に別々になるわよ。」

私にとって優真はマスターだし、その妹の真奈だって護らないといけない……

「それが嫌なら形だけでも私に引き取られたっていうことにしたらいいわ。」

そうすればきっと三人でいることは叶うわよ。お金のことだって心

配しなくても  
毎月多めに振り込んであげるし、保護者がいないといろいろと厄介なこともあるものね」

いや……そんなの関係ない……

「その代わり最初に言ったようにほとんど家には居てあげられないから、家事や買い物は自分たちでやって貰わないといけないことになるけども……。」

「それでもいいのなら私があなたたちの母親の代わりにくらいなつてあげるしわよ。  
どうするの?」

私はきつと今の……今の関係が大事だし好きなんだから……

マスターなんて関係ない。

護る対象だなんて関係ない。

自分が普通の人間じゃないのだから関係ない。

私は……私の意志でここに……

「今すぐに決めるなんてこと言わないわよ。なんなら少し三人で相談してみれば」

いいでしょうし。

そういうことだから私は一旦席を外すわね。少ししたらまた戻ってくるから…。

そのときにでも返事を返してくれたらいいわ。」

そう言い残して部屋から出て行く。

side 優真

カレンさんが部屋から出て行ってから5分ほどが経った。真奈もイリヤも真剣な表情で考えている。

僕はこの二人と一緒にいたい…。

僕のことをどう思われていたとしても、僕はこの二人が好きだ。

家族になって、今まで一緒に過ごしてきた。そんな楽しい時間…。

護りたい。

今も…。

これからも…。

ずっとずっと…。

護り続けたい。

この楽しくて…穏やかで、

それでいて儂い…

そんな？夢？のような時間を

よし！覚悟は決まった。他の二人にも聞かないと………

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1047x/>

---

魔法少女リリカルなのは ～平穏のため守り戦う少年～

2011年11月3日11時39分発行